

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381025

研究課題名(和文) 0～12歳までの発達を主題とする造形カリキュラムの研究 - 保幼小接続へ向けて

研究課題名(英文) A Study for Curriculum of Art Education for age 0-12 children

研究代表者

丁子 かおる (CHOJI, KAORU)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：80369694

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：幼児期の造形から小学校の図工につながる力は、色や形、場所などの物や環境に関わって子どもが作りだしていく基礎的な技能であり、自分なりの造形を楽しみ追求しようとする心情や意欲、そして、自ら考え工夫する、創造する経験であると考えた。子どもにとっては身近にある材料用具と出会い、自分の興味に合わせて感触を味わったり、構成をしたり、イメージをもって作りだし、その過程で、試行錯誤を繰り返し、造形を楽しむ気持ちも子どもにとっては造形の基礎となる。小学校での図工における創造性は幼児期から不可欠であるため、乳幼児期から子どもの自分なりの思考であり表現が生まれる自由が保障される活動が重要である。

研究成果の概要(英文)：The ability of Art leading from the young children to the children in elementary school is 1)the basic skills that children develop creating with regard to objects and environments such as color, shape, and place 2)to try and pursue their own modeling I thought that it is a feeling and motivation, and 3) to experience making a creative idea to think and devise by yourself. For children, feelings of encountering material tools in close proximity, creating a feeling, composition, or image in accordance with their interests, repeating trial and error in the process, and enjoying modeling is also a challenge for children It becomes the basis. Creativity in art work in elementary schools is indispensable from early childhood, so it is important to ensure that children's own thoughts and expressions are guaranteed from young children.

研究分野：造形教育

キーワード：保幼小接続 造形教育 美術教育 0 - 1 2

## 1. 研究開始当初の背景

現在、社会における経済格差が家庭教育へも影響を及ぼし、子どもたちの学力の格差を生じさせている。これらの格差は、子どもたちの将来にも影響していくといわれる。近年の研究では、こうした格差は乳幼児期から始まっており、幼児期に育まれるべき学びに向かう意欲や自己肯定感、協調性、社会性などの非認知的能力は、小学校以降の学力にもつながっているとされる。就学後に子どもたちの学力差は開きをみせはじめ、特に、貧困家庭の子どもたちの何割かは小学校卒業時にはすでに軌道修正が不可能となるという。ただし、こうしたデータがある中で、幼児期に質の高い教育を受けることで子どもの将来により影響があることも報告されている。1960年代から始まったペリー就学前教育の研究では恵まれない子どもが幼児教育を受ければ14歳時の成績、高校卒業率、社会人での平均収入のすべてが高く、犯罪率は低いとする結果がでていた。ノーベル経済学賞受賞者のジェームス・ヘックマン教授の研究では幼児教育に1ドルを投資すれば6ドルのリターンがあると算出し、そのため、OECDでは幼少期の教育を重視してStarting Strongを掲げる。幼児教育は国家的な投資と経費削減になり、子どもたちのより良い人生をつくる政策である。幼少期の学びの保障は、子どもたちの人生に大きな影響を与えることが証明されたことで、OECD加盟国では0歳児からの教育が注目、拡充されるようになってきている。

しかしながら、近年では、幼児教育を受ける事だけでなく、その質が子どもたちにとって大切であるとされている。幼児の運動能力がかつてより大きく低下し(杉原隆ら:2004)、外遊びの時間が半減している(中村和彦:1999)などの研究成果があり、各園や地域、学校で様々な対策がとられているが、授業時間数を増やしたり、運動遊びを増やしたりなどの対策だけでは、目の前の課題に追われてしまっているように思われる。子どもの意欲が継続的に生まれ、学びが連続性をもって育まれる視点を持つことが、すべての遊びと学習内容をとおして必要と思われた。

加えて、教育は幼児からという意識が国内にはある場合もあるが、近年の欧米での幼児教育政策では、より低年齢からの幼児教育を求めるようになってきていることを考慮すると、日本においても0歳から教育を考えるカリキュラムが重要といえる。

そこで、造形という視点で述べると、総合的な育ち保育内容では表現領域としての視点と、他にも物に伴う思考は環境領域でもあり、言葉とのつながりも深いなど、表現を中心とした広範囲での学びと育ちが関わっていること、物を介して育つ0歳児から教育を行える利点がある。

造形は子どもたちの実際の生活と関わっている学びと育ちを提供する。「生徒(15歳)

の学習到達度調査」(PISA)でフィンランドの教育が特に時間数も少なく、子どもたち全員の底上げを確実にやる基礎教育を強調していることで、世界的にも常に上位になっているのは、生活を受け継いでいく役立つ学習を併せて行っていることが一つにあり、子どものやる気を支えていると思われる。森林が多く木材の加工や家具など北欧デザインが有名なフィンランドでは幼児のうちからくぎ打ちをして遊び、小学校に入ると図画の時間の他に、手工芸の時間が同様にあり、木材加工や金属加工など年齢に応じて工芸の時間が選択できるようになるなど、将来、家に棚をつけたり修理をしたりでき、機能性とフォルムの優れた世界的に有名な生活雑貨企業もある。社会と生活の意識を教育がつないでいるといえよう。

日本はものづくりの国といわれながらも図工の授業時間は減少しつつあり、他にものづくりの機会がほとんどない学校教育現場の現状では、こうした造形教育における成果を継続させることは容易ではなく、各校園種で行われていることがほとんどである。そこで、連続性のある造形カリキュラムを模索することで、小さいうちから造形の時間をしっかりと確保し、子どもの学びの意識や経験を生活や他教科にも継続していくことによって、自分で問題解決し自分自身の人生を生きる子どもを育てることができると考えた。

前提としては、若手科研Bにおいて、筆者は、造形教育において幼小をつなぐためには、教科書がなく、幼稚園教育要領や保育所保育指針等に具体的な活動の記載がされていない幼児教育についても各園ではカリキュラムをもっていること、そしてその材料用具におけるカリキュラムの平均を年齢別に示し、その上で小学校教員の理解との差異を論文として公表してきた。これらを基に、本研究では、0歳から小学校への学びをつなぐ接続を考察する。

## 2. 研究の目的

造形教育は、対象年齢が異なれば目的は同じでない。根底には共通の目的をもっているが、特に、乳幼児の造形においては子どもの発達の視点が重視され、児童期においては創造的な能力が、青年期にかけては造形的技能や文化的視点が少しずつ重視されていく。しかしながら、教育、保育現場では、こうした違いについての不理解から、見栄えのする作品、写実的能力の高さが作品の良し悪しにつながるといった誤った指導がされることがある。子どもの身体や人間関係の発達を促す幼児の造形と、精神的発達を求めながら美術へ向かっていく中高の造形は目的もやり方も異なっている。造形活動は一律ではない。ただし、日本における保育・幼児教育の現場は圧倒的に私立園が多くを占め、各園がオリジナリティーある教育をおこなっているため、時に幼児に小学校の中学年以上の題材と方

法を幼児に強いてしまったり、子どもが感觸を楽しんだり素材を繰り返し試したり、子ども自身がつくりたいものを自由に思いついて材料素材から試行錯誤してつくっていく経験など、乳幼児期に適した造形の保育・教育を欠いてしまったりすることがある。

このような現状において、造形教育の意味を改めて発達に応じて考え、そのカリキュラムを追求することは、子どもたちの物と関わる育ちと学びを保証するためには必要である。また、将来の日本社会を支えていくためにも、日本人の創意工夫の力、創造性は一層重要になるし、子どもの主体的経験を重視した学びを広げていくことは大切である。その例として、イタリアのレッジョ・エミリア市における幼児教育はアートを教育方法に用い、ユネスコの芸術教育会議（2010）は芸術教科がもたらす批判的思考、問題解決能力、創造性などは他教科ではみられないため、教授方略が見直されている。

そこで、本研究では、0～12歳までの乳幼児から小学校までの生きる力を育むカリキュラムとその見直しをもつこと、その意味を明確にすることを考えた。造形はすべての年齢で子ども主体に行うことができ、子どもの人間形成を見通すため、保育者や教師、保護者にとっても分かりやすい学びとなる。本研究では、学びの連続性を重視した、経験カリキュラムの作成を目指し、低年齢からの造形教育を可視化し、特に成長の幅が大きく、人生の基礎を培う乳幼児時期から小学校6年生までを対象範囲とし、生きる力を育む造形を提案する。

### 3. 研究の方法

幼稚園、保育所、認定こども園を対象として資料収集と教材収集を行う一方で、保育現場や学校教育現場での保育や授業実践データを収集する。特に乳幼児保育については協力園や保育造形研究会での実践検討、イタリアはレッジョ・エミリア市の乳児保育所についても短期見学をするなどして情報の収集を行う。その後、これらをもとに、発達に応じた題材・遊びの提案を行う。成果は学会発表などで公表する。子どもの成長について見直しをもって保育・授業を行うことの大切さを説明し、カリキュラムの提案を行う予定であった。

しかしながら、学会事務局や入院手術と休職、復職後も体調が優れず長期的な不都合が重なり、研究成果は予定通りにははかどらなかった。そのため、研究を継続することで成果をあげられるように、研究方法を修正し、調査協力を最終年度にも依頼し、翌年以降も資料収集を継続できるように変更を行い、現時点においても協力をお願いしている小学校や保育現場での研究実践は継続している。そのため、本報告では、途中経過としての現時点での成果について以下は説明を行う。

### 4. 研究成果

以下は、公表できた成果をまとめる。初年度は、0歳児から小学校までの造形教育カリキュラムを考察するために、小学校で獲得しておきたい造形の力について中学校教員に、乳幼児期に獲得しておきたい力について小学校教員に少数ではあるがインタビューを行った。小学校では、技法の獲得以前に子ども自身が自分の表現を試行錯誤して追求する姿勢や、学ぶ意欲などが基礎となり、乳幼児期には、主体的に表現することを楽しみ、材料や素材などから試行錯誤する姿勢などが述べられ、いずれも学習内容というよりは造形表現における発達の課題があげられた。

また、美術科教育学会の乳幼児造形研究会では、美術文化を守り伝えるという側面が強くなる中学校以上の造形教育と乳幼児が社会の中で心身ともに育つ造形教育までのねらいの推移、生涯発達という視点について提案を行った。ただし、色や形を通しての造形教育によってのみ得られる子どもの学びと育ちはともにあることを述べた。加えて、『造形表現・図画工作』を共著で出版し、その担当部分でも、こうした乳幼児期から児童期への造形の目的の変化や、小学校の題材と、幼児及び児童の低年齢の鑑賞教育についての事例と解説などを載せて公表することができた。

2年目は、乳幼児の造形における意味とあり方、材料素材と保護者の援助について明確にするべく、調査を行った。イタリアは、レッジョ・エミリア市ブルーノ・ムナーリ幼児学校やフランスの小学校を併設する幼稚園、保育園、OECD本部の見学と協議に参加し、情報収集を行った。これによってイタリア、フランスの幼児教育と保育の質に関わる世界的動向について部分的に確認ができた。

また、乳幼児から小学校低学年の造形を対象とする国際学会AIEC(Art in Early Childhood)学会における蓄積されてきた論文を概観し、その動向をまとめ、美術科教育学会で口頭発表を行った。調査は、乳幼児及び児童の造形教育の目的と、発達の視点との関連について考察している。これらのことでも分かったことは、低年齢児の造形の世界的動向としては、子どもの思いを表現する表現主義や、子どもの認識を広げていく認識主義的美術教育から、親子のコミュニケーション、美術館におけるファミリーセンター、地域における伝統文化の継承と参画、科学や社会の理解、そして、低年齢からの個人のアイデンティティの確立を目的とした造形の実践や研究が蓄積されながら報告されていたことである。このことから、国際的にはその目的や視野が拡大してきていることが分かった。このことから、低年齢の造形研究の方が、小学校の造形教育と比較して、より広く柔軟な実践や教育、研究が行われていた。

こうした知見は、その元となる発達理論において、ブロンフェンレンナーによる生態

学的発達理論が援用されていることで、発達の視野が子どもの身体や精神の発達のみならず、地域や文化的範囲の中で相互作用として育まれて発達していると考えが広く用いられていることが改めて確認できた。そのため、世界的動向としては、これまでの材料用具や限られた発達観を拡大し、題材設定やプロジェクト型保育及び学習として、柔軟に小学校へも接続をする教育方法も考えられており、これ以降、これらも研究の対象として考えることとなった。

3年目には、乳幼児の造形に関して乳児(0,1,2歳児)クラスに焦点を当て、乳児クラスの造形に関わる遊びについて題材の材料素材と用具、環境構成について事例収集をおこなった。また、保育については、ビデオ記録と協議を併用したカンファレンスを研究協力園で繰り返して行い、保育記録をまとめることで、保育者の保育力の向上、省察、協同での検討などから、保育の質の向上について合わせて調査した結果を日本保育学会のポスター発表で公表を行った。具体的には、佐賀県の有田町にあるあかさかルンビニー園において1~2カ月に一度、0~2歳児クラスにおいて筆者の監修の下で造形の保育を計画してもらい、実践してもらった。その後、毎回、終了後にカンファレンスを行い、保育者が作成した保育記録を集めて、最終的に分析を行った。この過程でポイントとなるのは、子どもの発達に合わせた遊びと、保育者の援助であることが分かった。遊びについては、子どもの普段の姿で「隙間に物をおとして楽しんでいる」とか「扉の中の物を出してしまう」といった0~1歳児クラスの様子から考える。例えば、穴落としの遊びが繰り返し楽しめるように穴の大きさの調整や落とし物に分かりやすいように中に鈴やビーズなどの音のするものを入れておくなど、子どもが開きやすい扉をダンボールで作って中に素材を入れて遊び環境を整えるなどが遊びを考えていく工夫として挙げられた。これらの遊びは、0~1歳においては、身体のバランスづくりや歩行、両手での操作、指の使用などから身体的発達の観点が他の年齢よりも重視されて工夫されていた。また、保育者は、語彙の理解が未発達な子どもたちを複数で保育するため、互いのいる位置、意見を出し合う保育の共有の場と時間、準備と保育、ふりかえりなどの場面で協働する場面が多く必要であることが分かった。特に低年齢になるほど、子どもの遊びについては子どもの移動範囲が狭い分、保育者が多様かつ厳選した材料を準備したり、環境についても高さや広さなど配慮する項目を多くして整えたり、保育士自身が子どもと素材を介して遊んでみることで子どもの遊びやすさにもつながる場面が見られた。こうしたことから、保育の質を高める保育者間の協働と子どもについての情報の共有が造形の保育においても子どもの遊びの多様性を生じさせたり、

遊びの継続時間を持続させたりなど、一人一人の子どもが夢中になって遊びこめる保育、つまり質の高さに影響をすることが分かった。様々な年齢で様々な経験を持つ保育者たちが互いの価値観を話し合い、共通のねらいを持ちながら協働で保育をつくりあげていくことの重要性とそれを生かすことの利点について学会では公表を行った。

そして、雑誌においても、先ほどのあかさかルンビニー園の実践を紹介し、乳幼児においては共同研究を行った事例を挙げ、0歳、2歳、4歳、5歳クラスまでの造形のカリキュラムに通じる具体的な実践事例の紹介と解説を行った。その中で、低年齢児が物と人との関係の中で育っていく視点、感覚や運動機能の育成に重点を置きながらも素材と関わって遊びを拓げる事例、イメージを色や形、材質で表現していく事例、地域の文化を理解しながら新たな世界を創造していく造形の事例などを紹介し、説明した。このようにして造形を通して、子どもに育まれる力を年齢に応じた事例に基づいて示すことができた。

最終年においては、発達心理学と造形の研究者4名で日本保育学会の自主シンポジウム「幼児の造形活動から考える小学校図画工作との連続性と非連続性」を行った。その中で、筆者は、「保幼小の造形を長期的発達の視点からつなぐ」というテーマで話題提供を行い、討議に参加した。幼児の造形と小学校の図画工作科の目的は重なる部分や共通する部分はあるものの、同一ではないこと、幼児期の造形は、科学でもあり、子どもにとっては意思を表しやすい言葉でもあり、社会性を育む手段ともなることを説明した。幼児期の造形は、対象が未分化であるため、子どもにとっては身近にある素材を確かめる時間にもなるし、素材を通して生活する地域やその文化の中でそれらを理解しながら発達していくことにもつながる。そうした生涯教育的視点が強いのも幼児教育の特徴である。例えば、先ほどの雑誌にも記述した例として、あかさかルンビニー園は、有田焼の産地である有田町にあるため、1歳や2歳の子どもが用いる粘土も地域の素材であることを重視して陶土である。そして、年長児は未来の有田の町をつくるプロジェクトの中で、器を焼くときに敷く皿のようなもので、不要となる「はま」をもらってきてはそれぞれにデザインを施したり、未来のありたの町をイメージして焼き物でできたお城をつくったりなどの事例を紹介している。

このようにして、ブロンフェンブレンナーによる生態学的発達理論に基づいた発達であり、学びが保育の中で行える総合性が乳幼児の造形の特徴といえる。また、この考え方は、子どもが将来の地域を担う人材として参加ではなく、参画をしていくことを求めている、ロジャー・ハートの「子どもの参画」の理論にも適応している。

このような認識を持ち、小学校の図工につ

ながる力は、色や形、場所などの物や環境に関わって子どもが作りだしていく基礎的な技能(材料用具の経験)であり、自分なりの造形を楽しみ追求しようとする心情や意欲、そして、自ら考え工夫する、創造する経験であると考えた。

基礎的な材料用具の経験とは、少し技能の必要な難易度が高くなる金づちやのこぎりの使用といったことよりも、子どもにとっては身近にあるのりやハサミ、セロハンテープを正しく楽しく使う経験や、土や水などの自然素材、様々な紙や、空き箱などの廃材といわれる生活にある材料と出会い、自分の興味に合わせて感触を味わったり、構成をしたり、イメージをもって作りだすなどの経験である。その過程で、試行錯誤を繰り返し、素材や用具を扱い、造形を楽しむ気持ちも子どもにとっては造形の基礎といえる。ただし、制作過程で保育者の手順に沿ってただただ活動するような遊びや、自身の工夫できる範囲が限定的な遊び(例えば子どもの自由が少ない季節の掲示づくりなど)ただつくること描くことにおいて子どもなりの表現ができない活動は創造する経験にはならない。同時に、ただ、保育者が子どもに適した材料や環境を提供しないで放任する保育も小学校にはつながらない。小学校での図工における創造性は幼児期から不可欠であるため、乳幼児期から子どもの自分なりの思考であり表現が生まれる自由が保障される活動が重要であることを述べた。

以上が成果であるが、研究が滞っていたため、現在も進行しているところもある。これについては、今後も成果がまとまり次第、公表をしていく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 丁子かおる「陶磁器のふるさと有田に息づく、静かで豊かな創造の園、認定こども園あかさかランビニーエンを訪ねる」『美育文化ポケット』2015, Autumn, Vol. 2, No. 3, pp. 6-11(査読なし)

〔学会発表〕(計4件)

1. 口頭発表, 丁子かおる, 王寺直子, 日本保育学会, 椋山女学園大学「保育者の個性と感性をつなぐチームによる乳幼児の造形」, 2015, 5, 9

2. 口頭発表, 丁子かおる, 美術科教育学会, 上越教育大学「乳幼児からの造形についての一考察」2015. 3. 29

3. ポスター発表, 丁子かおる, 日本保育学会, 大阪総合保育大学「造形の学びと学力の関連について調査研究 幼小接続に向けて」

2014. 5. 18

4. 学会部会発表, 丁子かおる, 美術科教育学会乳幼児部会, 関西学院大学「美術教育と生涯教育の視点から乳・幼児造形教育を捉える」2013. 10. 26

〔図書〕(計3件)

1. 丁子かおる, 他8名(保育の造形研究会)『DVDでわかる! 乳幼児の造形』サクラクレパス出版, 2016, pp. 6-13, 74-75, 84-86, 104-109.

2. 磯部錦司, 丁子かおる, 他10名「造形表現・図画工作」建帛社 2014, pp. 5-7, 76-77, 108, 117, 144-145, 152, 154, 166-168, 172-173.

3. 田中享胤・三宅茂夫編著, 丁子かおる『子どものいまと未来を考える 教育課程・保育課程』(第20章を分担) 未来, 2014, pp. 274-286.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

丁子かおる (CH0JI, Kaoru)  
和歌山大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 80369694